里見八犬傳 第輯 巻四

へ13
709
52

明治三十六年十月九日購求

遠門 13
號 709
卷 32

南總里見八犬傳第九輯 卷之四

東都 曲亭主人編次

第九十八回

盜人の從者偷走りて盜ふ戮さ辱る
賊巢ふ宿りて强人賊難を免る

却説高梨職德い强人但鳥業因ゐを既ふ搦捕しかぞゐ下れ小嘍囉二名も一緒ふ
殺系まて夥兵ふ牽ー衙所ふ還そ即便他ゐ出処来歴做ゑー悪支ゑ責問ふ業因
ゐい頼陳ー七罪ゑ免れんと欲ゑれゑ這時まで腹内ふ設耳ある上ゑ已まゑ他ゐ答ゑる
ぞー七出処来歴年來の悪事ゑ申えあゑ業因並ゑ小嘍囉ゐ詮ー難て陳ゑる
身ゐ是年来近江る膳吹山ふ躯住て相従ふ小嘍囉ヨヲくあり毎ふ良民を殘害ー財
貨ゑ奪略ー又口腹ゑ貪る與ふ孕婦の腹ゑ裂てそゐ胎内の赤子ゑ茹ー七折ゐ酒
菜ふまたるゐ且ゐ日ゐ祇園會ゐ山鉾を視ず思ひて五四個の支黨ゑ從へ悄ゐ地ふ

文溪堂藏

京師に来れども本日尚君羊集の内に面善れる者もあんや欲と聊遠慮と旋らしつゝ経紀
児ゐ打扮て市廛の簷下に立在る折腹内そりのとゝ奇病暴に発りしが積悪忽
地発覚れて檻の獣ころ〳〵と送るく招しければ業因が腹内そ呵々とうち笑ひ
是よりその聲絶ゆけり職徳これを聞果てのゝくそ奇に驚ろく然氣もんせ老業因ゐ
うち対ひ仇と疾視てやとれ兇賊思ひ知るそ那袴垂保輔金山左衛門藤澤入道浅
生松孺昔ようして世に唱える強人ハヨヲれども人の胎と奪ふくその子を啖ひ
唱ふ惨毒鬼畜ゐ弥増る悪報竟ゐ免れず腹内より聲と発してみづ〳〵その毒悪と
許るハ冥罰訓覿面汝が為ゐ殺される幾の人の怨の魂魄汝が五臓ゐつけ入くめられ
あらんぞ〳〵地獄天堂遠ゑあらぞ輪回応報甚近し自業自得ゐあ〳〵やとられて業因
怯る色ゐうち仰ぎて冷笑ひて腹そのゝとられしとも我一刀と腰ゐせば殺脱んと易り
老と数ゐ形貌と変て身ゐ寸鐵と帯ざりければ和主の手柄ゐせられしとハせも果ば殺兵

文溪堂蔵

ら仏ハ四能立ると暴ゐ索命縮て牽立て支黨三名も共伴ゐ堅牢〳〵ふ獄舎ゐ駆ゐ入り恁而高梨
職徳ハ業因が罪悪と件の奇異の趣と三管領河島山ゐ斯波細
居ヨハ〳〵討ゐヨ勢とのそせばハ全功ゐ〳〵ゐるべ狡什麽仕るべうのやと旨と伺ひ禀ゐ〳〵三管領
猶便詮議あり件の但鳥業因ハ都下へ来その名ゆえるのゝ膽吹山討ゐあ六角家へ仰付
られて観音寺の城より遣されん職徳今番小る山賊の頭領と搦捕りハヨヲ〳〵ゐ柄ゐ世ゐ
強人ハ斬ろうれど胎と奪ひて其小児と啖ひハ前未聞のゝ〳〵かの如き大悪人ハ常刑をのそ〳〵べ
ゝく八創の極刑ゐ行ふ〳〵ゐ支黨三名も倶ゐ鳥首ゐ〳〵べと下知せるる是ようり職徳ハ衙所ゐ
退り旨と伺へ〳〵先業因を生ゐ〳〵八創ゐ斬割て〳〵ろ〳〵て後ゐ磯りて小嘍囉三名も倶ゐ賀
茂河原ゐ梟首ゐ〳〵ゐ是を視るの堵の如く那怪談と詰伺へて或ハ年来業因ゐ腹を裂れ
胎と奪れる幾の婦人の怨ヨハの所為ゐるべ〳〵とゐもあり或いそを非として那強人の腹内そりゐ
ぞ〳〵ゐ〳〵ハ應聲虫とゐ病痾の所為ゐるべ〳〵そ詩ひ〳〵ゐ〳〵ゐ中ゐ博士ありて詞徐ゐ諭さそう。

応聲虫といふ奇病ハその病人がものいへバ腹内にも聲ありて又その如くものいふ則是响の音に応するに異ならねバその病人ハ默然たるに腹中に聲あることなけれバ但鳥業因が腹内に聲ありしハ応聲虫にあらず是を怨霊の所為といへバ據あるに似たれどもこれも推量の外なし其口ハ毒悪の冥罰なく然る奇病を得て罪悪を自訴して誅戮せられし又他が小児を啖ひしも然なる可奇談と做すに足らず烏許と喚做し國の俗ハ各々初て子を生るときハ善らバ解てこれを啖ふなる味ひ美ければその王に献ずるよし後漢書外國傳に見えたるを以て我邦にても其性敢惡なる者を烏許の白物と喚做しつ又烏許がましなどいふとも則那より出る文老学庵筆記八の巻に蜀人ハ人物の誇るべき者を見てハ嗚呼といふ鄙むべき者ハ則噫嘻といへりとあるハ烏許の義と同じからず只その似て非なるものを左まれ右まれ烏許の如きハ已が子を喫ふを毎とするもありといへバ又人の子を啖へバとて世にあるべきにもあらず然るに我大皇國ハ神代より武をもて宗とし、ぬへども素より魚米に富されバ獣の肉すら喫ふ者稀也況人を啖ひしハ繪巻に載る酒顛童子と。

今番の但鳥業因のごときハ好て人の小児を啖ふことを好まざれども好て已が小児を殺ハ愚夫愚婦ある村落邊鄙を間引國と喚做しつ約その國の愚民们ハ生る子のおほかれバ養ひがたしと患ひとして子ハ一人の外ハ挙ずも産婦みづから生れし小児を膝の下に布殺すを命けて間引といふと然ればこの烏許國の俗の鮮て啖ふ只その初子のみなるに其子のおほかるを厭ふ愚俗の両二番間引もおらず又只の是を何とかいはん那業因が人の小児を多く啖ひしも冥罰や腹に聲ある悪報を免れざる這理るをもて推するときハ人の子を多く殺し己が子でも多く間引し夫婦の膝に必人面瘡を生じて聲高やかに不慈慘毒を罵らるべき護るに然るなるけれバ怕るべし懲ざるべし公然として俗を做する間引國にも悲しむべし又那間引國を隣て隨胎國と喚做するあらざるか男女密會をして有身する腹のせいろさるのみ業をもて胎を隨せり又密夫あらぬ夫婦でも或ハ年々に有身ることを厭ふて隨胎國に走るもありかくのごとき愚夫愚婦ハみづからその腹を剖きてその子を啖ふに異ならずば夫網隙を鑽り法度を犯して男女密會をするまで免れがたき罪過

なる事その腹に在る子を害さバ不仁是より甚しきハなし。然れバ那夫婦の如きハ。堕胎の祟あらずと
いふとも神も佛も然る不仁者を守りもせん。慈悲ある人の他をバ悪鬼羅刹と思ふべけ
れ既にして神も守らず又佛も憐まず。身後の悪報子孫の零落免るゝ路あるべからず。世に身
後の業果を怕れ子孫の栄を願ふものハ焦冥の虫なりとも故なくして是を殺さず。その身の與
ふる壽命を欲りし。子孫の栄枯を念ふものハ勉て陰徳を積べし。子孫十世に及ぶまで血肉を全く
相續ぐ家ハ先祖陰徳あるによれり。又何ぞ疑ん。然バ善悪の應報に遅速あり早晩あり。今
番業因が奇病の悪報を得て那間引囝堕胎囝に知らせる幸ひあして迷津の二代にも
なるべし。是契善の提徑にあらずや。と解示せバ件の人々感服して心裡恥しく思ひけり。間話休
題ぬ此時近江の膽吹山なる但鳥跖六業因が山寨あの妻ハ嚮に身故りて但鳥源金太素藤
と喚做す一個の男児あり。性悪力量武芸まで親に劣らぬ暴雄也。今玆二十一歳なれバ且奸
智者も長されバいぬる日業因が京師へ赴くを去るべからんとぞ諌めしかども聴されざれバ不甲斐なる

事とぞ。這餘ハ業因が手下の小嘍囉百五六十名ありけるのみぞなる。折々分散して隣國他郷を彷徘
徊ありて暴捍を旨とすれバ目今山寨に在る処一百名に過ざりけり。然バ又いぬる日に頭領業
因に従ひて倶に京師に赴きたる那小嘍囉四名の内中独り緝捕を免れし者ハ卒八と喚做すもの
也。渾名を馬面郎とよべるその面框最長く板歯斜に反されバ名さへ卒八とよばるべし。卒八と反
歯と音訓似たり。却這馬面卒八ハ業因が独子なる源金太素藤の得意也。折々陪堂に
せられしかバ逃て膽吹山に還りし。折先素藤が便室に見えて耳に告げ逆旅の凶変業因ハ京
師で祇園神會を観る折腹内に聲ありて悠々と唸りしを室町家の市正高利が職徳に
笋知られて矢場に搦捕られしよしを詞急逼しく解示せバ素藤色を失ひてありつらん実遠か
らバ這里へも緝捕の大勢を向られん歟。疑ひなし。その折齎一力を勠して一旦防戦ふとも一百
許の小勢にて克を取ることかなるべし。三十六計走るをよしと定めて快く這山を立去りて又せん術もあら
んかし。さハ思へども皆悉山寨を棄て出るものならバ必追隊に赶逼られて免れがたきこともあるべし。

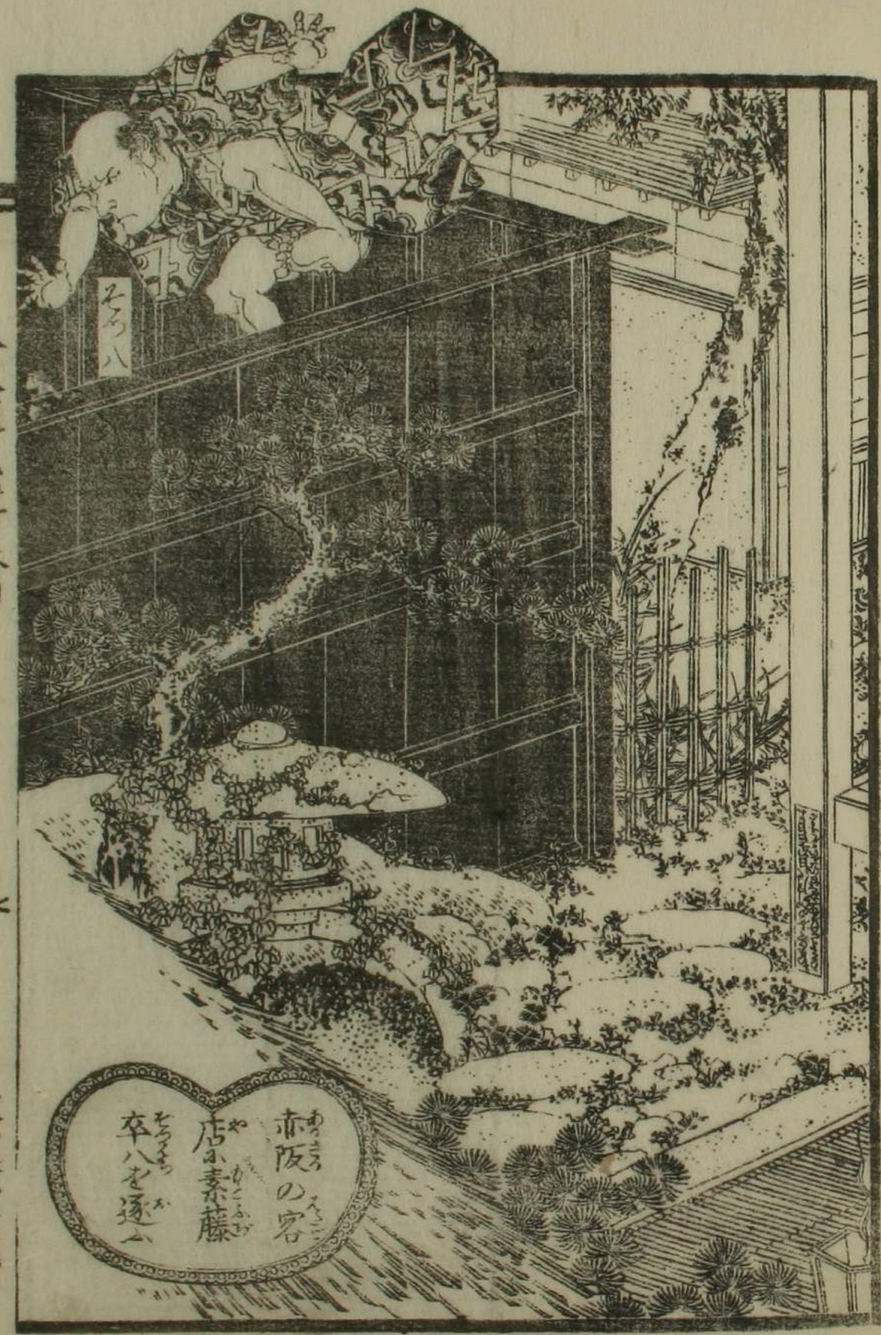
縱追隊ふ遇ぎとも脫れ去りしと知られぐ久後背安らぐ。恁れぐ京師の内裏ぐ伏家へ都て
秘して箇樣々々ふ誘え我身ハ獨和郎を將て遠く他郷へ走るべし。謀ぐて人ふ疑れて
よくせかしと期ど推せぐ卒八听く含ぐ矢てそそ妙策ぐ。ろ泊ぐ然らぐ左いつ右ちあへと心を
屬けつ屬らる逆旅の准備遽しく紀素藤ハ親の有財ど悄ふ合る出てる一千五六
百金あらぐ内中。十裏千両を勒壯ふ藏め腰ふ纏ひく餘る五六百両ハ行擔ふ造りて卒
八ぐ肩ふ掛させんとて准備ふも整ひれぐ素藤ハ然ぐ乳ぐ伏家の老賊礪時願ハ平田
張益作ふと喚做る両三名ど招ぐよせて告るぐ和主們いまぐ知らぐや京ふ大人の消
息を賀して卒八がかつ來られつ子の親ふ思ひるハ今ふそでぬとぐ。大人の所要ハ別紙ふ
あらぐ我ふも京師へ來とぐその夏の趣ハ祇園神會ハ二三度觀られど今茲ハ特ふ奥ヨ多ろ河
原の納涼ハ爲ふ愛ぐ紀ふ非除神會の日ふ後るとも卒八を將て我歇店へ來よ孤疑て親ふ
等にるとりしかしてのひら偽れぐ今ふ立出て路次とそぐて京師ふ到らん姑且留守ふ憑む

のぐとのられて大家異議ふ及ばぐそも差次しぐるる紀亭午ハ酷暑ふ堪ぐ難ぐ今ふ出
て夜行を縮ぐ幾日もあらぐて京ふ到らん留守ハ我們ふ泊ぐ居ぐ紀ぐ共倍ふ詰ぐて
貯て目送りけり。小程ふ素藤ハ凶ど避て吉ふ趨る籌ぐ東ぐ泊ぐ居ぐ紀ぐ投て往方ど定ぐ
ども先美濃路へとく辻ふ程ふ卒八ふ後ふ跟ぐ紀ぐ先ふも立て慰めつぐ慕ぐ慕ぐ俱ぐ抑近
江の膳吹山ハ坂田郡ふ在り。山ふ東ハ美濃州ど山の東北州界ふ千正まで十八町あらぐ紀ぐ
れども官道ふあらぐ素藤ぐ膳吹ぐ山寨ど遽しく立出ぐ未牌の時候ふ及ぶ山路ハ日
影の沒易くて夕ふ三里許下晡ふ及ぶ紀ぐ登時卒八ふ後方ふ素藤ど咽嗟て
やよ哺小頭領這頭ハ麓下の寒村ふ及ぐれぐ好飯店ど泊ぐ紀ぐ小可先へ走拔けて好宿徵ぐ
又其首ふ出迎へ出ぐん是ふ路ハ髮直ふて迷ふべもハぐ迹ふ徐ふ來ふ及ぐれとぐふ
素藤領ぐて。そハふく心ぐ紀ぐ快ふ及ぐれぐ卒八ふ。阿唯々々と応ぐ及ぐ先
たちぐ東ど投て走りけり既ふして素藤ハ今宵の歌宿を卒八ふ儘しふけれぐ路を三ぐ

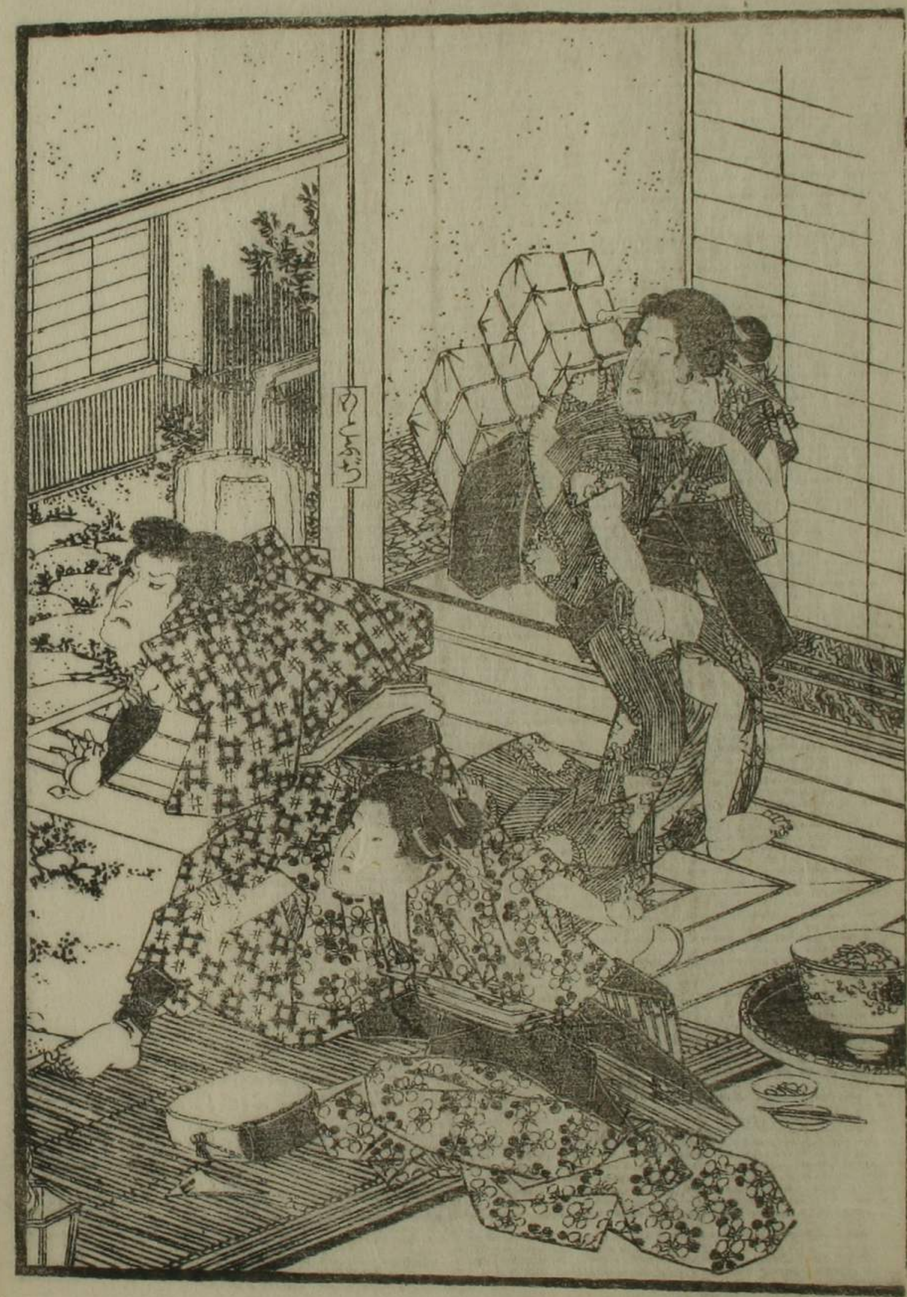
ぎ既ふして黄昏時候ふ侶奈之との〻村ふ来るけり。まうれども卒八ゑ何里ゑ行けり。歩の迎へ〻店の公詹下ふ立るゞと。槿て目標ふ者くるものえねば素藤ゑも疑ひ惑ひて這地方の家毎ふ倦る旅客ふ宿借さゞるとそ。那這とゑく尋問ふその甲斐もゑく日い暮て卒八々竟ふ空ゑ来ぎ。當下素藤い後悔臍を噬むまでふ蹉跎ゑく恨めども甚術なし。腹ぺこぺこと肚裏ふ思ふゑく我けゝ那奴ふ馳しくる行裏ふ六百両の金あるふゑる給ひて那奴い逐電せるゑん。日屬那奴ゞ我ふ仕て忠心あるゞふえくるふ。今番京師の凶変も伏家の人々と図ひて逸早く我ふ報る功さへあれば心饒しと毫も疑ざるけるゑ我ゑく鈍ー

かゝ紀今ゑる往方と渉猟るとも。這頭い岐道ヨゝるふ既ふして日い暮ゑる什麼いふーゝく便宜ゑ図ゞ紀幸ふして我腰ふ。ゑ千金の盤纏あり。今宵い且這地方ふ暁ゝと明日快楽ん〻と思ひかゝる村稍盡処る。村翁の家ふ投宿と求めて才ふ一膳二三碗の蹂飯ふ飢を殿酉せーのゝ恥て枕ふ就紀れども腹立ちふ宿も睡られざその暁天ゑる早飯と促ったゝ草

装して笠深くして立出ゞ。這頭い通て品降る鄙あれど膳吹山へゑい遠くれば後安くゝ。卒八奴い官道の〻ゑを走ゑくゝめと。ゑ孚思ゞて間道ゑる垂井のくふ赴くる路の長短損益ふ拘つゝゞ。既卒ふ紀横ゑ復ゑ。暑紀日銷ー渉猟難ん。稍垂井まで来ふる折暮ゑふ程ゑくなりーかゞ。亦復一里十町ゑる。索ゞて赤阪の驛ゑ来ゑる。ゑく歌店と投め。折夜い初更ふゑりゑけり。然りけれども這地方い昨夜の侶奈之村ふ似ざん詹と比べ。客店ふ土妓曲娼ゑ多ゑて夜い特ちゝふ熟鬧ひゑ。倦而素藤ゞ今宵の宿い木偶舞屋と喚做しゑる最大ゑる客店ゑゞ。躰て婀娜ふ案内ゑもられて奥まゑる禰室ふ入るゑの時隣房ふも安く歌のーその聲卒八ゑ似ゑりーゞ。素藤い隔亮の建縫の透間よりその人を偷看ゑふ果して紛ふくもあゑ。那馬面でありけれ。謀ゞ悄々地ふ一刀と含ま抗て腰ふ帯る間も怒ゑ堪ゑ。隔ゑる紙門を托地と蹴ゑ紀て好竊偷奴ゑ出せ。覚期せよと罵り哮る聲も尖く身を跳らして走



文溪堂藏



蒐らんとせし程に卒八を吐嗟とばかりに駭怕れ盃盤を踏砕き蹴散らして慌て庭より逃走
んとて塀を乗りて外面へ撞と下りて又走るを素藤は逃さじと續きて塀に手を掛て閃りと
うち踰て修煉の剽捷何里ゆくも赶蒐る迹にて土妓と艶曲妓們が駭譟ぎて人を喚ぶ聲
の遠く聞えければ卒八は命涯りに逃れども折から二十日の月刺昇りて翳る便りもなかりき
あらバ是非なく御影寺のかたへ走るに前面に一條の川ありけり是則株川也涉さんとするに浅瀬を
知らず背後よりは素藤が赶ふこと甚急にして間近くなりしかバ引返して挑戰んと欲けるに。
手に一條の棒も持ざれば腰に護身の刃もなかりければ進退ここに谷りて已を得ず件の川へ跳入
らんとせし程に素藤快く走來て大喝一聲轂を閃す刀の光は今世の別路卒八が右の肩
尖より斜に左の腕までずんど両段に斫れて仆れたり既にして素藤は四下を見
かへり喘を定めて先血刀を拭ひ收め然而卒八が屍骸を探るに那六百両の金はそが侭紺の
布の勒肚に收めて腹に纏着てありけり。余此の日用銭も他が懐にありければ皆悉とり復

去て更に又思ふやう這奴は我伴當なれども金も亦足我東西なれども只逃さじと思ひ惴りく。
生拘るべしと忘れたり結果て我憤恨を洩すあらバ又故の客店へかへりなバ反て人に疑れてむひ
解くとも甲斐なかるべし幸ひにして金は皆這奴が身に附たりければ迹は迷せし行衛は雲に
とても惜むに足らずと我も世間廣かる身となるべきで毛を吹て疵を求むるよしせんや夜は深るともこの
川を渡して別宿を求るにあらずとも。と肚に問ひ肚に答る身の往方思ひ決めつ卒八が屍骸を
川へ蹴落して然而船を喚び渡を求めて御影寺の驛に赴きしに首夏の夜なれば短くて手く曉に
時刻になりしかバ客店の門を敲けども宿借すべくもあらざりしまゝに誘へ房錢をまヨヌく
合ありして其天を才に明しけり是よりして素藤は千五六百両ある金を潜かに二箇に分ちて半
分は腰に附け半分は肩にうち掛て岐岨路を東へ赴くに素藤より急ぬ旅なれバ筑摩の温泉に
立よりて夏を過して八月の時候鎌倉杖を曳て世渡る便宜を求むべかれ倘然る所寓あらまほしと
うき路費を旅より旅に皆喪ひつ又舊の山家になるも何の里の日の照らざる急ぐ又要なき

文溪堂蔵

多くの人と獨占る無敵の料簡岐嶇の旅宿に日數歴て筑紫の温泉に來ふければ某甲と
呼ばる喚做き客店の坐席と借りて逗留あり日毎に浴湯あらけ然ば這地も山里ゆえ根津の
有馬伊豆の熱海に似るべうもあらぬれど那這より旅客聚合ふて夏は湯治を旨とあれば
思ひ寄らぬ徒然ゆえ詞敵も稍生來て尉ぶるよりあり是ゆより素藤は五六十日筑紫に
在り三伏の暑氣早晩冷て稍肌膚寒くなる隨に同宿の旅客們は漸々に立去て四下寂
あくまでも素藤も然べとそ筑紫の歌店を立出て上毛より武藏を歴て新橋を鎌倉へ
親ぶそと思へば歩も找えそ西くエ又只一日ゆえ既に武藏なる熊谷と鶴巣の間と豫俗に曠
野を獨過る折ふ曛昏に昏ふ夕ゆけの浩処に両個の暴雄鹿栲の夾衣を裳短に被下し苛
物作りの山刀を瑠降に腰に跨へ身長より高に茅萱の中より突然と顯れ出て去高の路に
立塞ぎ素藤を伝と疾視てまれ行人命惜くば盤纏も衣も遽与てら給倘又惑て不事
いば真草行の差別なく刃のきれ筆もいとせぎ覚期とせよと權の訛聲順刃光りと引拔

たる登時素藤亳も諜ぶ幼解く立と投捐て立對ひて冷笑ひ噫嗤ひ似而非剪
徑們が獨行ぞと侮りて虎の髯掖く鼠の非車頭顱と棄ふ出さる狡とらせも果ぎ両個の強人
眼を瞪ら聲苛立て命知ぞの假猛者息絶る折後悔き本亨をとせんと左右より數ふ
閃りと一ト外して拔合る刃の電光二人を敵に然しも修煉の
刃尖に當難る両個の強人東と投て逃走ると素藤透さず赶蒐てもことのまぐ幾ぞ花
さく路の秋草の中に撲る鉤索に忽地脚と縛れて憶ぶ撲地と滾び伏その左右なる芒花の
蔭より両個の強人走り出て起んと蠢く素藤ぶると枉げ足と推縮ゆく十重廿文字に結杈り
け当下逃る両個の賊も走りかゝるうち笑ひて這奴聊本事あり買賣に骨を折せ かゞも生
と拘りたれば殺ふ易らいでくとひつも刀を抗て砕んとせ伏家の両賊推禁めてやる寺這里
そ屠りそ骨を折る功をえば這行裏の重げる獲い必ヨヲ法べ這侭宿所へ帰て還
て頭領達に箇様々と報ば挿栄あらん尓ると野敵ふ来るとらんとふ逃る強人們い

共侶ハ黙頭て然ら活しと杠をちん足を抬げよ由断しと啖ひ着れをりを貫目あり四人持
て好荷ぞとあるる臭ハ散動めて宙ハ吊しと野を西へ幾町ともなくれて来り介程ハ素藤ハ
賊の圏套ハ乗せられて既ハ擒ハるるしらば爭ふとても益なしと思ひ絶てめらい走活し他仁ハ
儘しる肚裏ハ思ふ我ハ是世ハ知れる山賊の獨子也今這奴仁ハ暴掙ハ我も亦生れ
ぶるハ慣覚し業るふ窃の梓ふと廢てるるを早年ふ比て這前徑仁ハ死ぬ
め得失自他の差別あれども現川幸ハ川山幸ハ山で終るとハ鄙語も今ハ我上之ると覚期の述
懐ハ品ハ集る就鳥野ハ棲む虎も勢ひ竭て倒ハ死と等の外ふりけり却説件の強人
们ハ素藤と和てゆくと約莫半里餘りあて樹柱間ふ芒番山の中ハ曠荒る廢寺の門内へ
杠入れて繞ハ殘る所化寮とおぼしき縁頰の下ハ卸し居て奥へ知せの暗號るべ一個の賊ハ紛
附て衣領ハ掛る叫子を瀝々と吹鳴せば奥より出る両個の頭領燭を秉り刀を引提
け半朽る縁頰ハ雙立ち左見右見て若们今宵ハ早ふ獲ハある様甚麽ぞと問へば

大家跪て頭領達所ゆけるも亦例の曠野ハ我们四名網を張てふ鳥もがるとを等し黄昏
時候這旅客ハ只一個裏を肩ハしと来ハれば我们前後ハ立ふれて先二人しと素引見るふ
思ふ倍る本事あり克と取るとを易らるれば引外し逃走りと赶しと例の鉤索ハ搦滾しく
生拘ふ行裏の最重を荷ハ肚ハ纏ひ路費もあるん四人ハ徒まで骨を折て生拘ふれば野
歃ハ世ハ網搦の仮ハ和て来れらの為る日獲さ也あひる新刀を鉄ふ鞭ふるん骨逞しく肉多
かるく見ゆと皆誇臭ハ報れば両個の頭領ハ一人ハ黙頭てそる然ぞ骨の折れるん
現好肥る大漢也。鉄刀ハ究竟ハ竟ハ。とのひつも共侶ハ近く立るそる燭を抗てにぐと
うちそそ俱ハ敬驚ハて和君ハ膽吹の小頭領源金太主るるぞと問れて訝る素藤ハ遽
考く仰ぎ見て小ふ主们ハ　句　礪時願八　句　平田張盆作ぞいぞ　句　思ひけるぞ　句
今宵の再會　句　我を救へと叫ぶぞ願八と盆作ハ素藤ハ懇ハ
且縁頰ハ請登れば敬驚ハ呆るくふ下の強人頭を極ふ跪坐るを然ぞとと問へ願八

盆作呵々とうち笑ひて若們ハ近比這地で我等に屬されバ認らざりしも理りぞ這方さまハ豫て
より噂をきゝたる近江なる小頭領でおはするぞ。と諭せバ四個の強人ハ倶に地上に額をうちて小可們
眼ありながら比叡も瞻吹も知らずして酷く無禮を仕りぬ。允させ給へとうち陪話るを素藤禁
め慰めて命めて宛身の造化を心竊に欽ぶのを遂恨あるべくもあらざれバ強人毎ハ奪略りたる。
行裏と菅笠を主に返して去まくせしを願八ヤヤと喚禁めて若們ハ柴折焼く快酒盃の准
備をせよ。卒小頭領這方へと先に立て盆作と倶に奥ぞ伴ひける。恁而願八盆作ハ素藤を
奥有りける坐席の上坐に請ひ茶を看めて迭に別後の苦樂を告るに願八們が先の宿ろ和
君も豫兼知るべし。徃る六月某の日に和君ハ獨卒八をゐて京師へ赴きぬるその次の日の
るの室町將軍家の御諚として觀音寺の城より向られたる緝捕の士卒千五六百名何の
程にか寄たりけん山寨を緊しく捕囲して猛可に稠く入りたりしが伏家の人々駭慌て一柱も防
ぎ得ず峯上を踰て美濃路のかたへ脱れ去らんとせし程に多くハ谷へ赶落されて樹の根嵓稜に

身を碎し或ハ數多擒捕られて落亡るハ稀なりき。登時我們両名ハ桁渡旋風二郎井栗
昔九郎們と共侶に稍一方を殺披きて死ざることを得たりしが這那よ立潜びて七月の中浣に這
地に來つ這荒廢院を見出して隱宅にせまく思ひしに意ず先ゟ這寺に住る小賊五六名
あり初ハ拒みて容れざりしを武藝ハ二の町なるをもて竟に我們に戰ひ負て住処を讓りて手下に
屬て倶に稼んとて陪話しかバその意に儘して僕のごとく夜稼ぎに出せしより今宵和君を捕て
來りし四人も則先住の伏家也。そを他們が外に二人ありしを旋風二郎と昔九郎が倶して夜
稼ぎに出されバ曉天ならでハ還るべからず。大頭領ハ京師に在て腹ののふ奇病にとり年来の好
ずる所を覺れて市正高梨氏に擒捕られ給ひしのみならず三個の伴當共ハ侶に首級を河原へ梟られ
たる那里の沙汰ハ世の風聲に正しく傳へ聞きたり。和君の上ハいまだ知らず。什麼にかして昨夕まで
隱宅もなく旅より旅に這頭を徘徊ありなんと問へバ素藤慾然と氣もえせぬ故意なげく
嗟嘆して我も亦親の為又瞻吹の住処へも緝捕の向ふとの風聲をきゝて大津まで吟しが駿

文溪堂藏

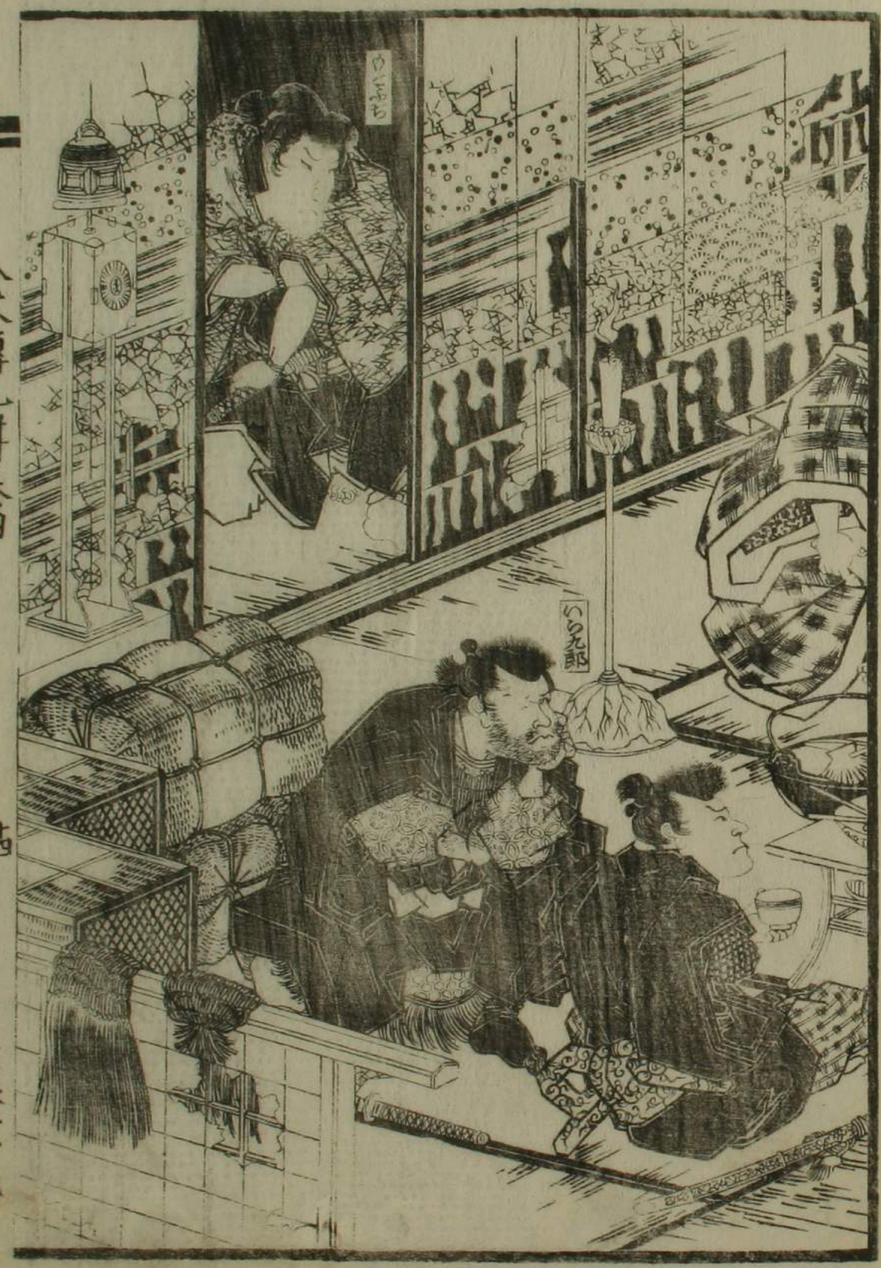
怕れて京師へいそぐ。伊陸と旋らして美濃ふ赴く。信濃ふ伶仃に九蔵の温泉店ふ逗留
あて。憶足も日と累る程ふ卒八を我行裏と撥攫して逐電あり。それも盤纏ハ此ごろ
ふ懐ふせしもあれバいでや鎌倉へ赴て世渡るよりゞと求んと思ふけれバ這地まで来て和主們ふ
環會ひしハ舊縁盡き禍の反て福ふ変れる之鈍べしくと諍友ゝ自祝して実説虚談機ふ
臨み口ふ信しと誘ふ願ハ也盆作も宜ふ然之と答けの姑且て素藤ハ又願ハ們ふも對
こて和主們ハいまゞ思ふぞや都て山豪ハ別世界ふ上ふ住る君もるく又機と包る同僚もあ
人の東西と我東西ふして富王侯ふ笑しくとも一旦露顕ふ及ばゞ細首と刎られて悪名と世ふ
送ものを唐山ふて山賊の天子ふなりしもあるとこ狭ゞけど我邦ふハ伊豫の純友京師の保輔豊
後の金山誰ゝ一國と殼ゞ従て子孫ふ傳へしめあるん是ふよりて観ると我ハ盗むゆゑふ方あり
國を盗て國主と云れ城を窃て城主ふなるの方とそもそも我ハ盗賊の名と負ぎしく
栄と子孫と伝るあり今戦國の世ふ生れて智計も武藝もあるゝ山豪ふて行果んを最

惜るべきの己と我稍思ひ起すべ今番鎌倉へ赴くも然る計較のあれバ時運ふ稱ふ
福ふあるべ我一城の主と成るべ必和主們を喚迎んその折我身ふ隨ふて貞の武士ゝ
這荒廃院ふ優ふ住ふと奥ふ乗して説誘れば願ハも盆作も叮ゝ倶ふ苦笑ひ
憑しの己ゝ前徑と做ふ極めて易く國を奪ひ城と含るハ企及ばゞ似ゝ和君が
口の半分でも然る造化の日もあれば我們必隨身せん空約束とのゝ咄とうち笑ふ
折ゝ下の強人們が酒を温め餚と添て素藤ふ薦めしかば是より主客盃を遣
替し又巡らして醉と盡して暗譚程ふ夜長ふ秋の時候ゝ子の中刻ふなりしかば
素藤ハ路の疲労と告て盃と辞しふけの因て願ハ盆作の下の強人ゝ吩咐て小室ふ素
藤の臥簀と儲け案内ふ立て明日と契りて別ぬ。仍ふ坐席ふ在りて睡ゝ件の四個の
下ふも酒と喫ゝ労して旋風二郎と苛九郎們ゝ還ると徐ふ起ゝ介程ふ素藤ハ醉て
臥房ふ入ゝれども毫も心ふ由ハ出ず行裏とも刀とも右と左ふ引着て陽ふ熟睡せ如く

折々鼾の聲と雫て内外の動静を覘ひけり。程ふ夜ハ既ふ丑三ゑんと思ふ時候に亭人の足响して折戸を敲て入るゆゑ。是則別人ならず願ハ盆作们が伙家の強人那井栗苛九郎と。桁渡旋風三郎が両個の小嘍囉を従へ〻。夜挿うち果て還れる登時内ゑる灯下れ賊ハ一名遠く縁頰ふ立出迎へ紙燭を抗て奥へ還らせ給へり。造化ハ甚麽をかと問ハ苛九郎も旋風三郎も共倡ふ舌打鳴らして今宵ハ甚不猟ゆゑ立る腹も宿所へ来て横ふゑ

ケ東西欲ーろ酒ある歟と問へも夕べ俱ふ草鞋と鮮葉てうち登る縁頰の片隅ふ菅笠ありとて那ハ什麽誰が佐を這隱ゆ相応ーから逗留客でもあるゑ歟と問れて件の夜下の賊ハ奥へ指さ聲を低めて然ゑ客もあり酒もあり。その故ハ箇様〻と那素藤の支の趣盤纏まるふ〻まで空骨折る本意なきふその崖略を耳ふ報れば苛九郎と旋風三郎ハ眉を顰めて頷くのみゑ伙奥へ赴けば願ハと盆作ハ席を譲り労ひて賓客残の酒を温め然而不要を薦め〻今宵料を素藤と再會の支の趣箇様〻と耳ふ示せば

苛九郎沈吟して和主们ハ源金太の口車ふ無せられてゑと皆実事と思ふ知れど酒家ハ一切あろ〻ふ故と甚と推ても足ゑ這夏膽吹の頭領が祇園會を親ふ京ゆゑんとハ。まて折ふ那人ハ賢達て諫めーと頭領ハ听ぎて躰て京師へ赴くるふ祇園神會がおのーろ。ゑとて諫ゆ子と吸ふをされーとのひーも算帳合ぎ招るゑとそ慌ーく出て曳ーも前後不都合必是搗鬼ゆ那卒ハがゑ〻本ある折那奴ハ京師の凶変とのまゑ伙家へ知せ〻て〻ゑ源金太ふ報るゑん。ゑとて那後生ハ親の有財と利せん與ふ件の変を伙家ふ秘して有ん涯ゆ。この金錢を攫ひて術ゑ〻ふ誘へて卒ハをのゑ従へて山寨を没落せーゑん。然ぎハ今ゆ〻那後生が盤纏まるふ該ハゑーとハ又旋風三郎も割膝と拊聲と低めて井栗哥々の意見ハ秒ゑ那後生の奸智ふ長ーとなるハ那折有財を伙家へ配分せ〻ん與ふ知ゑ〻支當黒一百名ゑ垂来殺ーふゑ〻ゑとゑ思ふ那折ふ緝捕使の大将ふ己が生死存亡と知せ〻とて〻の伎倆もありけん然ハゑと避て吉ふ趨る進退と知ゑ〻ゑ伙家の安危とゑ〻ゑハ獨命ゑ免れん與ふ



○文溪堂藏

支黨一百餘名を賣くる那奴ら計較憎むべし。恨みのある奴を生拘て饒せのこるべし飽
まで酒を喫ハて然ざら曾欵きゆゑんと敦圉暴く怨まれば苛九郎も歯を切りて今ゆゑ論
議ハ益々武藝ふ長て膂力おろかも醉臥しこれば殺し易ク盤纏を奪ふて腹を醫
さん皆立ぎやといそぎせば願八と盆作ハ傍痛げふ左右より推禁めて。咳ふ紛らしく小
室へ指さ示して共侶ふ頭を掉ク諫るゆう和主們がおのよ怨もその理ふ知ふあれども。そ
推量ゆて證据ゆ一旦支の錯誤ゆて舊ふ好の人を殺さば後悔もとも及んや。且面ニ日
這里ふ留めて胸を搦らべ漆下板貯ん然而那折の虚と実を知るようあって和主們が目今
論する如くゆらば俱ふる段を旋らて結果るゆ遲ふあらば且我們ふ儘ねと呂曾禁めく
已ばりければ苛九郎も旋風二郎もそと爭ハさまゆて腹立ちの茶碗酒ふ酌ん堰戎傾
けて。喫むと數碗ふ及びらば睡涼ハ醉臥して喚べど怨苛九郎重ね天窓の旋風二さへ又
起べもあらばれば願八と盆作ハ術生醉と奈末餘民の腕ふ換よと木枕と這那両個ふ頭の

下へ刺入れて卒と次の房へ退ぞ睡らふ就ゆけり然ば這坐席ふ素藤が臥房ふ小
室へ遠々ふ素藤ハ始より毛も睡らばければ件の苛九と旋風二郎が議論の趣を餘の
那折の計較と那苛九郎と旋風二奴が猜しゆられば怨雖言の思ひと做ゆ然もあらん幸
ひふしく願八と盆作が諫禁めて既ふ逼ア廿留害を免れゆるも一雲時の程ゆ
明日倘一致せられば主客の勢ハ同じかるゆ四個の敵を單身ふく防んすハ難ふ
べし所詮天の明るを待ゆて悄々地ふ這里を立去りて遠く他郷ふ走るふ如ク思へ
ども。做ゆも。我身ふの侭逐電せば那密譚ふ听怕しと。ゆも影と躯せしと亦
那奴們ふ笑れん要ゆそれと。人根性潛ふ起出て身裝しく行裏と斜ふ背へ投
掛て胷ゆ楚と引結び悄と一刀と腰ふ帯て偷歩しく近着て坐席の動静を覗ふ
願八と盆作ハ臥房ふ入りて睡のふけん只ハ苛九郎と旋風二郎のゆ衣も被ぎゆ醉臥して甲

夜の仮寝の盃盤狼藉燈燭の光幽なる素藤は這光景を折しもよけれと思へども
睡息を覘ふ樽より出せし熟柿に似たり。徒て心安くと獨含笑む大胆賊情先
苛九郎が枕方なる酒壺を含む抗く振試るに酒あり傍の茶碗も引よせ両三碗を
喫竭したる茶碗を措て四下をくるに苛九郎と旋風二郎が山刀二口あり一刀ゝを引拔
それば孰も焼刃微妙也。鋭刃なるべく思ふに其の中の特に愛さるを鞘に收めて腰に挿
副へ餘る一刀を引提て弗と吹滅す燈燭の烏夜に迷ふ左右なる配の先苛九郎が枕方に
探寄て胸前を左なる押へて禹歟と刺す勢ひ宿鳥を射るごと一刀也息絶たる頭
顱を躍て搖落して又旋風二郎を禹歟と刺す殺伐都て右の如く又搖落して旋
風二郎が頭顱を抗て苛九郎の軀の邊に捐措て又苛九郎が首を含抗てそを
旋風二郎が枕方へ遣違へる所の慰の遊戯血刀筆を子に突立て両箇の首を
置土立座這世那世へ行客の入船あれば出船あり尻に帆掛て走らんとす。搖探るに

外面へ出て雨戸を開く折甲夜に縁類に置れる菅笠を見て我東西と
引提て背門より出んとする程に尿水に獨起出る手下の賊が背門に立て秋の明近
き星とて仰ぎて身戦ひ慄て浄る去果て再寝の床に入らんと眼包磨る
撞見頭に素藤と鼻突合て驚と叫ぶ
聲を引せ素藤が引拔く刃に胴斫の大腸迸る血潮時天に躍て走る引く東
向の背門の戸を鎖へ出せば強人の宿を脱る強人の往方を知らざるなり。

第九十九回　素藤鬼語を聽く黄金水を施す
遠親邪説に惑て舘山城を開き

再説源金太素藤は那願八盆作に睡眠覚るに下を俱に我を赶蒐奪ん
と思へば略の好を凸凹と擇むとなく東と投て走るに約一里有餘に天い耿々と
明る這里は里人の居宅間に鶴巣の驛に仇を御ぐに便あり妖怪と強人は夜に

己が自由を得られ照日隈なき市中を那奴彌我を何とせんやと心あらぬて經紀況の廓ふ立ち飯と求め酒さへ喫て憩ふ程ふ日いと高く昇ぬれども願八彌い赴くも来ぬ日足うふ復路次といそぎて次の日い武藏の柴濱まで来ふけり折ふ黄昏ふ及ぶ其頭の飯店ふ宿り投てその夜鎌倉の光景を問ふ店小二ゞ答てふ近曽い山内の管領様も相模の北條家と戰絶ひび那里の神社佛閣も年々ふ衰微して今い世の鎌倉ふあらぬ且藤澤ゆも腰越ゆも新関を建られて他郷より来る遊歴人を容られずと咤えうり倦れば客人鎌倉へ赴くふとも自由を得ぬて況世渡りの便着るとふるべくもあらぬ倘世渡りの便着の輿ふ遊歴せまく欲りしゆゑ安房上總ふ優き地方を撰べ近屬安房の里見殿い神餘の輿ふ義兵を起して山下定包を討滅して以来安西麻呂の両敵も朝日ふ霜の消ふ似く幾程もなく亡びぬ然ば上總の城主達も威風靡ふ好を通して那るふ屬まとふ為る只その武略のみを恐れ民を憐て租税を重くせず賢と愛て世傑を徴めふと宵え

なり義實主いふ比龍田ふ隱居ゆゑ今い嬭子安房守義成朝臣の世なれども亦是稀る賢君ゆゑ廣く仁政を布給ふ上總いゆゑ下總まで半分いもんふ入ふと雖ども安房客人然でも鎌倉(もんとるべ)麁ふまぬ倘安房上總へ赴ゆゑ這浦より上總る象良津(出船日毎ふあり)立の旦開ふ附船まで乘走りゆゑ一昼夜ゆゑ坐ゆゑ下あの美い誰何と直実達ふ問ふ其の理ふ似れば素藤い沈吟して頭を抬げ小二ふ對ひて いつて趣あるふ鎌倉ゆゑ由縁いる名高る都會の福地なれば世渡の所由あるべしと思ひ空憑ゆゑ鈍望を喪ふ楫を含む直ゆゑ上總へ赴くべけれ明日その船と憑ひのゑとふ小二い再説ふ及ぶまゑ果て退りぬ倦而素藤いその詰朝件の出船ふ乘りふ折り順風をければ十七八里の海上と呂い一日ふ走りゆゑその夜象良津ふ来ふけ具ふ歇店と定めて歴覧ふ網引漁猟る浦の光景ふと珍らしく奥れば一日二日と過ふ程ふ肚裏ふ思ふ我身這地ふ由縁ゆる坐ゆゑ食べ箱も空ふと世の常言ふ

盤纏を送りかゝぎとそ使ふて減らぬ金錢あゝんやそと虚空と旅宿して明し暮れば愚魯人安房の國主里見氏の賢を愛し士を招くと人の噂ふ聞くゝど那里も亦由縁なる我身をいへば近江なる山賊の獨子なれ只是刑餘の質下草之此の力量武藝あれども一番も戦場ふ出て物ふ遇ひ一番あゝば何を得意ふして那里仕を求むべき是も亦要なる所ざ。あらせんこの糸まらせんこの糸約之所詮本州の貪民ふ錢を代貝ー利を廉くして恩を施ー交を結ば做さまあらんわせん。そも亦紹介なる友なくて輒く人ふ談ーかゝらん且泉の落着く処を定め帮助る友のいで来もせん先や便宜の地方と擇ん。膝と容るふ若くとあらじと主意既ふ決りければ亦復上總十二郡と隈もなく偏歴る程ふあの年の及十月の初旬ふ夷潜郡館山の城下なる普善村と村と唤做す村ふ来ぬ。這地は壽永元暦の年間鎌倉將軍頼朝の功臣なりける上總介平廣常が館あゝし処之然ば也今も館山の名ハ遺ゝて殿の基と唤做ふる処もあり又蘇々利とのふ村あり。今ハ碓氷とのふ村ふ作る。昔頼朝卿の梶原景時ふ賜ゝ名馬磨墨ハ這蘇々利ゝ出ゝとふ。

然ハ廣常が幕下なる馬ゝ梶原ふ會ふ所ふ八幡の神社あゝ。ゝを上總介廣常が宇佐の宮と稱せ又西の方ふ正八幡の神社あり。廣常が謫死の後鎌倉ふ建立せられ又南の方ふ諏訪の神社あり。その社頭ハ取大なる樟樹一株あり又同國長柄郡上郷村なる諏訪の神社の側なる在る処の大樟樹と這那都て一對ふ。その巨大十八圍あり云根柢半ハ石ふ化ゝ幹ハ中心腐朽てその虚ふ入る処宛洞嵐ふ相似る内中ふ數人を坐ゝ且その枝葉婆娑として京毫も日の光ゝ洩さゝ。低て地と距ること約一丈許ふ七大枝六岐ふ分れ其の間ふ雨水と湛ゝ旱天の折も涸ぎとなし。その上總人ハ上郷村なる雄樹と並ぶ善村なる雌樹とをいふ惜むべ。普善村なる何の年間ふ枯果て件の社頭ふ松杉の年老て枯て天なる合抱のものあり。抑件の普善村ハ上普善下普善の二村あり蘇々利も亦普善村の屬村なり當時ハ長屋一千餘戸なり。その時館山の城主ハ小鞠谷主馬助如満と唤做て夷潜一郡の領主ハ這館

山と號する城の當時上總にある処の二十六箇城の外なれども數代の舊家なりけるに如満が父祖に肖ざ常に酒と嗜と色とを好むを為に課役租税を重くして民の困苦なること甚だしく妾の首飾と衣裳に手金を費せども采地なる神社佛閣の酷く頽破に及びしを管に許して敢修復とこそふるのみれば嗷許淫祠とてその許さるものと罪をも神田寺料を奪ふことなりの故に那普善村の邊なる八幡諏訪の神主も他郷へ走り跡断絶して狐兎の棲まるふるに非道を神の祟にあらけん是年の冬十月の肇に小鞠谷如満の采地にも時疫蔓延して流行して病臥するものあるに都て疫癘は春夏の間にて流行せれど冬に至りて命ある病者の多くは死るべきものと看官思ふもあるべけれども安房上總の西國は東海陸地の盡処なるに且山を背にして海に向ひ國は暖にして冬は春寒なる土人その春寒を倒寒と喚做して然れども何國も初冬は最暖なるにそ世に十月を小春と唱ふ況上総は暖國にて十月小春温暖の折時疫なりとせば又口いの理のなきにあらずかくの如く病疫は領主のみならず招く所罪なる民に及びは風俗通に本文あり城は火を失なれば禍池魚に及ぶが如しのみ誠と云へ間話除繁に程に素藤はその折夷濤郡に来て普善村に過る程に冬の日の暮るに苦て黄昏時候にあらーに散店を求んと欲するに村人都て病着あり但聞病悩呻吟の聲戸々に絶ざるのみ宿借もべくもあらざれば素藤殆困に果てせん術のなく隨に露宿せんと思ふに殿の臺の頭に来る諏訪の神社あるとそ只得く社頭に找に入るに鶏栖の側に大樟樹あり稀なる老樹にければ胆を淡くして鵠立て親るとに約莫半晌許既にして暮果ければ躰て社壇にうち登りて一夜を這里に暁さんと四壁酷く荒されども必由緒ある大社とあるーに本社拝殿の仏あざる九庸にも人詣なぞ檐傾いて荒れ屋に柱斜に簀子は朽ても有輟に雨露を避るに足れり既にして小夜深て森々たる茂林月を洩さず寂莫たる廟宇露最寒ろ睡られぬ隨にとぢ長く覚る冬の夜の丑三時候にあんぞ忽地外面に物あり玉面嬢々と喚ぶ聲を登時大樟樹の

下欽となぞ。来る者の誰と問ふ外面の物答て我は是疫鬼と秋より後は我堂の生贄の
折ふあらばれども。今茲は殊に温暖なれば這頭を聊徘徊して。土民とヨク病にて今より安
い房へもうまく欲も和嬢に近づき比まで。久しく那里ふ棲されば國王の賢不肖政事の好悪を
大槩は知るなんその爰を問ふて。進退を定めんと思ふのまとにへば樹下の物答て我も亦安
い房の國主ふ最堪くに怨あり。いくぐ送恨を復さんと思ふのめらく爭何せん那國主里見
父子は智勇兼備の名將ふ賢を愛し民を憐ふ酒色の驕奢なく外は苞苴の
貪林なく。君正くまて臣忠なる。我ふの故ふ便りを求ふ和老那里へ赴くとも煙毒決して行
なるべくなれば且這地の民毎病臥これども。一人も死しなるのまく。是ふの時まあらばる故ふ病の
勢ひ緩くまもとらを外面の物なあれば。いくぐふ物ふ。
死せる者半ふ過ん城主如満の非道なる神は怒り人は恨まて這禍を致さとにへども民は
なふ神佛と深信の者尠くなれば壁言はあの神社の如祀祭奠の礼既ふ廢れて酷く頽破ふ

及ぶのまく。尚神威あるふ似たるなそ我その注連を越えるなり。那病勢の急なる收まる合は
これら見笠の故なるとなふ樹下の物冷笑ひて神の威はまれかくまれ這樹の虚実神水
あり。黄金を漫まる。一晝夜ふして這水を病人ふ飲しめば病着立地ふ癒り果て偏に
理を知る名醫ふ遇ば。その折和老誰何なるやとふと外面の物推禁めて不然なるまはいい
ぞもあれ縱をを知る醫師あるとも這頭の民は領主の與ふ年々ふ讃令まられて圓金一枚
持るはみ。あばその折當処を去らん鳴呼なるとと敦圍にしが是とるの後怪物の問答
寂と音絶て簀子の下ふ鳴く蟋蟀の聲のみ幽ふ聞えけり。まふ藤は憶ふまも怪物なりし
相譚は。その支の趣を現ともなく。竹果て且驚ふ怪なる。肚裏ふ思ふ。今宵外面
らの來學物の玉面嬢と呼かけて問答ふ及びは世ふふ疫鬼なるん又玉面嬢と呼れい
則是木精ふ那樟樹の精ふ火ふあらんなくぐ如きふ這地の民の今時なるふ病疫は
城主小鞠谷如満の悪政非道の所以とるはへば我那民の病疫を救て恩を施さ

必我を德とし。竟に羽翼と為ることあらん。人望我に傾く時は、那如満を推仆して我
舘山の城主となるんも亦その折の運なるべし。小銭尚よく捨ずもあるべいかゝ。大利を沒
や噫。よしなを吟ずるを。胸に計較む秘密の覓胆曉るを遅しと。程に約莫二晌
許にして。鴉の茂林を離るゝ聲那這に吟えけり。登時素藤は行裏に收めたる五六百
両の金と皆出して。百両毎の封皮を折紙に小祇に包み。推乃々大樟木の下に赴き左
右して攀登るに。人少き枝に熟されば一丈許上にて分れ。六岐の枝に乗るとして。先その
枝の間なる。虚の中に身をさし入れて。底の深浅を試るに。その水の冷やかなる。骨に徹りて堪
かねて。辛くあって。指さしの底まで届かざりければ。低て心安しとて。小祇なる居ヨマの金を送
もるく木の虚なる。水中に沈まゝ。枝より下るに。輒くて。准備なくも。軟たければ。又那這
とゝろく。巡るに這本社の後に。老て大なる栗樹あり。折々冬の肇るれば。落る栗子
朽もせずヨマろ。あゝ。究竟。と。拾拐りて。燧と含む。出落葉を裹て。炎くそこれをうち噢

ふに。三浪の飢と。凌ぐに足れり。低而這神社に詣ずる村児も。欲得と。為るに。全村都て
病臥れば。詣る者もあるゝと。等程に。第三日とに。朝辰牌時候に。病髄
ひとる一個の後生。竹枝に。携りて。辛うして。詣ずるあり。その人。拜殿に。ふうち。朝ひ。堂を。鳴
らし。額をうたて。黙禱。約半晌。許。ゆう。後に。身を。起して。かゝり。去んとせし。程に。素藤。やゝと
喚。禁めて。和郎は。什麼。何里の人。と。重病。いまだ。疾らず。行歩。難。我の。為体。と。我外。ぐう
ろに。刃。我。仙傳の。良。茅。あり。人の。病疫を。救ん。與に。諸國を。遊歴。すると。久しく。その。病者を
救ふべし。とのれて。件の。後生は。訝りて。素藤。と。ぐとうち。目成して。そゝ。扶して。そは。へ
小可は。程遠くして。上並。善村の。荘客。碟谷。沙八が。孫。児。と。褚九郎。と。喚。做。もの。人。今。茲に
時なる。病疫。全村。枕。と。拾。るに。我家は。上。二親。あり。下に。弟。あり。妹。あり。皆大
病に。犯されて。鍼灸。茅。餌。も。驗なく。露命。旦夕に。逼りたり。そゝ。中に。小可は。病。痾。聊。良の
見。辛くして。這。御社に。詣て。親。胞。兄。弟。の。病。鬼。退。治を。祈るに。抑。身。何。國の。大人

そ然る神某と傳受して作善と旨とするかと問はれて素藤い找こよりて頷
けて我い原是京家の浪人ト部某ひと唤做もの陰陽の術醫療の神方先祖相
傳の秘録あり。ことさらそ世ふ萬人の災厄を救ん為ふ諸國を遊歴して這地ふ来ついぬる
日這舘山の城下そ歌店を求んと欲せ戸毎ふ皆時疫ふ病臥ことく羨引
のるー已とを沼ぎ這神社ふ通夜して夜を暁き程ふ憶ひで神の示現を蒙りその
社頭る大樟樹の虚ふ神水あると知れりその神水ふ黄金を浸すと一晝夜ふして件れ水を
汲含て夫病人ふ飲ませれば病疫立地ふ癒ると箒帚の艾を拂ふ易ふ我幸ひふ
那這そ受る謝物多くありその金を咸那木の虚へ投入れ水ふ沈ま却村人の来ると
既ふ夫そ三日ふ及べる和郎い身ふ病ひあれば那大枝ふ登りかたらん先我水を汲て沼
さんその身い這里そ試喫むべその餘い家ふ返そ親胞兄弟ふ薦めれば死ん起
あて生ふ回ー壽を増ー花ふ至ることー和郎一家のみるべ全村の病疫を驅除んと

疑ふべらいでくとのひつも用意を考うけん神酒壇の口缺ると社壇の下ろ含ると
携て樟樹の大枝ふ攀登りて壇を虚ふ推入々虚る水と十分盈ん又底深くを
入れて圓金一枚含る出ー徐ふ樹下へ下り立て然而褚九郎ふ示せ曰ふ這金い那神水ふ浸措
ける徴るれば水と俱ふ和郎ふ含せん貪ん者い這里へ来て水いけんと金とも含るべ去れば人別ふ
一枚の外を許さんその美を隈ふ他よと叮寧ふ教諭して件の水を飲ふけり現熱病の劇しき
の熱邪腸胃を焦せ折黄金一味を水ふ前呑て冷ると覚て飲ませばよくその熱を治せ
ある然ば素藤が鬼語を聞て伐の如くふ做せ処自然と其方ふ稱ひけん褚九郎ふ件の水を
受戴ふく飲ふ時を程ふ快然と心地清ふ成りー名雀躍ふる不勝の歓び素藤を
神と拜して感涙坐ふ找むと覚ず頭を抬げ小可仁幸ひを慈悲廣大る大人ふ救れく
某水即效あるのみ多くの海士が塩焼く辛ん世ふ圓金一枚惜氣もなく貸のいせる徳義大仁
あん身るーで誰ふあるべ年々小鞠谷殿ふ責含られて全村困窮せるるふ剰流行病

屯。飢渴ふ及ぶめ多くの小可们も朝夕の煙絶えとせ折れば辞いで御恩と受まうこん噫
歎ぶ慙愧し。爭く退て黄金水と親胞兄弟ふ戴せ然しても餘らぶ四鄰の人ふ分與く。
その毎と俱ふ復てそまゐ〳〵めと歎びと演べ勇立てかへさい杖と忘れるけん只堰をのを携て家
路と投ていそぐけり偖て又一晌許経る程ふ那黄金水と受飲てその病ひ癒うハ小鐏柄杓を
准備し携えいまぐ飲ゐざる者ハ多く携る杖頭ふ小堰竹の筧ゐっどと拽て褚九郎と先ふ
立て。諏訪の神社へ皆聚来て素藤ふようと告歎びと演徳を稱へて黄金水と汲んとも
けり。當下素藤ハ衆人ふうち對ひ病着既ふ癒さる者ハ樹ふ登り神水と汲食ゐく全
村ふ配分せよそぶ中ふ貧くて。飢渴ふ及ぶ者あらバ我隊樹の虚ふ措く咎の圓金一枚或
貸もべたぞ或ハ貧のて多く食んと欲し或ハ貯禄あるぐ〳〵俱ふ貧窮のかりちして一枚ゐ
も秘せバ神水の效ゑのミふあらぬ神罰立地ふその身ふ及んゐの咎と怕れ慎むべ。とふふ大
家跪いて仰うけぞりまりぬのぐゐハ歎ゐる不義とせん快々水と賜ねと連らふ云ふて已ざりけり。

尓程ふ病着癒さる者錢名欲准備の素階子とを繰ゆ〳〵樟の大枝へ投掛く。
繰ふ水と汲合せ衆人ふ遞与きぞ老幼男女受歎びて飲めぞ立地ふ病着癒けり。
或ハ病勢劇くて起ゆるこゐゐ〳〵ぬのあいその家族隣人ゐ准備の小鐏筧堰へ汲入
水と遣て飲ゐるとハ病悩退ハ一雫妾時の程ふ癒河ふ及べゐ只ハ歎びあるこゐ
ぞ貪し者ハ乞ふ儘して圓金一枚と貸れ〳〵漸々ふ〳〵ふ偽て陸續して聚ひ
ゐる者西三日ハ晝夜とゐぞ。その汲合ゐるとヨゐれども虚ゐる水の竭ざられべ。その折柴滿
一郡の民皆生ることゐて貪し者ハ朝夕の薪水の價さへ添られ〳〵べ貧病も亦類ふ〳〵
ゐ。這再生の大恩徳と報ぶいあるべゐ〳〵とそ全村速ふ商議して轎子とのて素藤戎
村長の宿所へ請容れて日毎の御食饌大〳〵ゐ〳〵願ふ杖とその地ふ住めて徳と一郡ふ
施しゐ〳〵とそ全村請て已ざりけれ。素藤ハ計策成りぬと思へど故意澁りて屈請て
兼引ゐり是ふゐり村人们ハ又商議して那諏訪の神社ふ目今祠官絶果ゐ大人を那

里の神主にせば神慮にも稱ふべしとぞいひしを素藤に告げ残を集めて件の社地に家を造
作り其の里に素藤と請稱して命を聴くに智謹て帰依のもの多く是よりして素
藤は母黨の氏を冒して蟇田權頭素藤と名告りて心中もあらぬ神に仕へて加持祈
禱を宗としつその法術を知ざれども信ずるものは心もて極めて効驗ありければ神仙と
稱へ尊敬して敢その誨にしたがはざるはなかりき さるほどに素藤は奴婢七八名を従へて萬
事に毫も不自由なければ既に五六百金を村人們に貸しつれども尚も數百金の貯禄あれば利子を
多少に拘らず乞ふものあれば又貸けり是らの趣早晩に館山の城内にも聞えしかば小鞠谷の
家臣們も素藤に加持を請ふて難病速に痊るもあり或はその金を借りて貧病立地に
安堵のありけり素藤貨殖の人ならねども士農工商尊信して東西を饋るも多く借財も
期を違へず返さでなかるものなかりしかば才に一稔許の程に村より一二の富家となりぬ意ふに這素
藤は山賊但鳥業因が子なれども料ずも鬼語を聴て六百兩の金を惜まずして樹の虚れ水に

浸して東濃一郡の人の病疫の死を起し生に回せし陰徳により陽報あり其頭の土民に
尊信せられて偶に福をうけるなるべし その人の胸に計較ありて真実陰徳ならねども人を活
する功あれば善報ありしと見べからず況直実慈善にして施を好むもの勉て人畜の救厄と
放生を旨として久しく徳を積むことあらば善報子孫に及ん事亦何の疑ひかあらんや惜むべし
素藤は足ることを知り分を守りてその枝葉に止らば他が親の積悪を償ふよすがとなるべきに
奸計その圖に當りしより止る処を知ずして後竟に身を殺して天誅を免れがたかり然ばぞ
世の人一善を行ふと見れば必一善の果報あり又一悪を行ふと見れば必一悪の果報あることを知るべし
善悪の応報は宛環の輪るがごとし 小人の僥幸は氷の山雪の佛久しからぬを知る譬にこそ
閑話休題爾程に館山の城主小鞠谷主馬助如満は蟇田素藤が奇の趣を
傳々と傳聞て怒ること大かたならず一個の老黨兎巷幸弥太遠親と喚做るを身邊近
く喚よせて敦圍に猛く吩咐るやう若們はいまだ知ずや近比より我采地に蟇田權頭

素藤と僭稱をる。一個の檻丞児あり。しきく愚民を惑して怪談妖語いひざるとき。神と籍
で鬼に托して邪術を行ふと雖ども。加旃徳に諏訪の神社の祝ふるを。社地と占て那里
居宅しなほも不義の富に誇りて我を刺ると告るものあり。今速に搦捕て民の惑ひを醒さべし。
後漢の米賊張角が妖蘖に乗じて終のあんに汝那里へ向て搦捕て牽めて來よ立地に梟
首をせ。那妖言の根を鋤くべ。愚民們倘悲を請ふて妨ふるとも赦て開も悉搦捕りね。一
人も漏さべ。夥兵を居ヨ俱して倘ふに餘るとも斬棄にしてもけまうあるべ。快
快せよと性急る君命推辭に由もなく遠親に遽く言業あり。退て先隊兵を聚合
けり。去為に件の遠親も鄙に愛子の難豆を命危しと折素藤に祈禱を請ふて死
ざるとを泣く。他借の急債を贖ひとあり。恩誼の得意人を緝捕使に命せられ居心
窮に困ど果てをとられいく思へども諫て听るべもあらねばうと悄々地に村長に告知しく素

藤と走らするに。あくとあくまと尋思と考へ。一封の密書を寫め密使をもて普善の村長
許遣しれば村長はそのころを泣く驚憂ひく徒々と村人に偽示し皆共侶に素藤の宿
所に取囲合ひ衆議を凝らして送りて堺をさんとも信りれども素藤は亭宅も誤く気色なく
惴る村人們を推鎮めて各々然のを氣と悶ゆる緝捕の頭人遠親は我と断金の交りあり他ば
寄來る折を待て進退を定むべ。姑且酒家に入ち任ねとの事を大家爭ひ難て心のとるく思ふ
のを默止て時を移しける不程に兎巷幸弥太遠親はとく村長に内通をれば速に素藤を
落し遣らん今は時候なべと思ふ心を色にも出さべ。夥兵四五十名を従て諏訪の社頭に
赴き先素藤の宿所の四方を犇々と捕巻せしに家の内は人居ヨ有籠りて
人咳の聲も無べ。訝りて夥兵を禁め獨背門より找ひ入りと素藤みづから出迎て客
房へ伴ひけり。その事の為体村長を首として究竟の壯佼百名許坐席の左右に雁列れば
遠親は思ふも似ず是れて找難くると素藤は慇勤に上坐に席を讓りて聲を悄めく

談まほうと在下させる罪をけれども小鞠谷殿が憎れて緝捕使をもよりて尊公悄々地に告
ぬいと他郷へ避けと誨る交遊の情義ヨク沒ぐ〻これどもその身に惜むが足らぬ憐むべし
這村人們が非道の領主を撩役せられて那悪政が堪ざれば俱に他郷へ走んと民人都へ離散
せば明日より誰が畊さえ安房の里が攻殺されぬ必隣郡の城主が畧られ人在下尊公を相
まるが極て一郡一城の主が多くは福女の美相あり彼の折をもそ箇様〻〻徒々計りぬ在下
一臂の力を勦して大事立地が成就まべし是民の帰く処天の與るを取らざれば反て外患を受ること
あり深念と決めぬかと理のめりて共誘ば遠親忽地心動して沈吟ること半晌許
後ふ頭を抬げて先生の教諭宜が理あり卑職その德をとくども幸にして邦助を仰
大事必成りぬせば遮莫世が弑逆の罪人と為ると爭何ぞ素藤推禁めて昔唐山
周の武王と共にその君を暴悪の紂王と討滅して民の塗炭を救ひ聖人と稱らるを
三尺の童子も知れり誰が人公を弑逆といえん〻〻決断まもなくと説れて遠親再議が及

いぶ竟がその説が儘せるが素藤が父村人們が笠詩策を示し暗弑を定るが大家都く
そのうちと沒て假が素藤を杠結てその両力を持めあり又素藤と合るりめあり又その餘が
都て素藤が與が領主が恩赦とこそふと唱て鎌を腰ふし短刀を懐ふして俱が城門が赴
けり低而遠親が外面がもし置る駕兵們を紹介て素藤を村人們がこそ先へ捕て搦
捕めるそ他們をも相俱と見るのようと守えあげ大家路次が心を屬よと実事を為
らが言示して館山の城が入る程が黄昏がるりけり介程が小鞠谷主馬助如満が
鬼巷車弥太遠親が素藤を搦捕て牽めて来ると村人們が歎て恩赦と云べそ
後が限て推参せとが支の趣とうち守て怒が堪ず有司們が燭を秉て問注所の
上坐に出て来つ先素藤を牽居さてみづ〻〻罪を責んと支の紛れが村人們が扇の内
〻〻綱へうの登時鬼巷遠親が支の趣を守えあげんとそ縁頰よりうち登ちて主の身邊へ辻
〻〻如満が労いその美を聞んとそうる処を遠親遮さず腰刀を抜くるもとせず如満の

首と拠地と毀ち落せば吐嗟と駭く有司の毎ごとれ幸弥太乱心をする狂主君と絶ぜ大逆無道其処退治せと罵りて捕んと闘ふ当下遠親聲高ふ人々いまぞ悟ぜや如満年来暴悪なる苛政ふ堪ぎ民皆叛けるこの故ふ我里見家の密意ふ従ひこの天誅を行ふめ濁を去て清ふ就ぐ倶ふ栄と子孫ふ傳ん倘るれ惑ふて疑を抱ぐ如満のごとくべ快面縛して降参せぎやと喚くの左右ふ當て躬方と憑とふ戰ふ程ふ素藤ハ假ふ撓る絆の索とをあく振解捐て村人ふ持る刀と奪ふ縁頰より走り登るとを遣らどそ柱る野兵を物ともせぎ右と左へ斫伏せこの今この吉の勢ひふ村人も亦起り立て利鎌短刀と打振ふ倶ふ戰ひを幇助ふ野兵いふ有司ども皆一山辟ふ斫立られて書院のくへ逃走るとを遠親い赶捨て引返ー歩ふ主の首級を素藤ふ授せんと頭髪を抓を引提て身邊近つ来ぬるとを素藤とをあくそろそろと嗤て拔刀を抜ふ遠親ハ頭と毀れて脚空ぎるふ軀も揺と動キりて漬る血ハ側る杉戸の蔦を染做せり。浩処ふ城内る老黨若黨幾名欲鬼巷遠親们を毀る捕んとく雑兵ヨヲく驅集めく短鎗を引提鍬又るンどと携乃えく皆廣庭ふ稠入りーと素藤謀ぎ遠親の首級を刃尖ふ串ぎ持ーとを縁頰ふ立迎既ふ近つ城の士卒を差招ぎく聲古同やふふ當城の諸士それをよ鬼巷遠親謀叛ふよてく。その君如満主を弑しる天誅一霎時も借ぎべ〳〵不佞料ぎ諸士ふ代りく既ふ遠親を毀る捕こうとりく當郡の民们我を推して。倶ふ城を守らんと欲も是天命の帰る処勢ひ推辞ぎを沒ぎ權且當城を預りく各々と共ふ吉又を謀らんとの義を許容せこうやと詞巧ふ鮮ふもそ前後左右ふ究竟の村人百名許利鎌短刀とをふく持くヨ勢を怕ぎ面鬼の侮らかくてえこるふ當城の士卒们ハ曩ふその親族の如満の怒ふ觸れてる討ふせられーめもあり然でも嬖妾の與ふ費を厭つぐ諸士の俸禄を優ふせざりーとと恨ーく思ふ

とみひさ首級
かしまの
不人形

素藤巧を
館山の城と
奪ふ
ヨ九郎

ヨヌ〻且素藤ふ惑されて。他を仁義の君子と稱て。尊信するも甚〻ふ素藤が立地ふ逆臣兒巷遠親を。毀捕しると。徳と〻。都て帰順の思ひあり。登時當城の老黨奥利本膳淺木碗九郎と喚做すの。支の勢ひを乞て。阿容〻と鋒を倒し刃を鞘ふ。跪坐て答るやう。如満暴戻年を累ねて。逆臣の與れ紙せし嗣べ男女の子達もあるに。尓るふ先生立地ふ逆臣遠親を誅しめて。當家の與ふ大功あり。願ふ今より主君と仰ぐ。犬馬の力を盡べし。ち見どゆるりいへとそ。躰て降参すべ。後方ふ從ふ城の士卒們齊一千載を。唱へけ。抑這一巻両回ハ水滸傳る王慶の小傳の筆ふ擬しる。欲都〻八犬士の事ふ干らず。眈贅の話ふ似ども是後回の襯染ふて。這事るくらあるべ〻。毋竟素藤が奸計とそ。館山の城を横領すると。後の話説甚麽そ。そも次の巻ふ鮮分ると聽絲かし。

南總里見八犬傳第九輯卷之四終